

## 英語表現における犬の否定的なイメージについて

船 井 純 平

### 抄録

英語には犬の否定的なイメージを含む多くの表現が存在するが、そのイメージの由来や変遷に関して詳しく説明されることは少ない。本稿の目的は、英語表現における犬の否定的なイメージの由来とその変遷を考察することである。関連する資料を検討した結果、以下のことが明らかになった。まず、英語表現における犬の否定的なイメージは一般的に想定されているよりも古くから存在した。それはキリスト教的な文脈における比喩的な定型表現に由来するものであり、実際の犬の境遇を反映したものではなかった。一方で時代が下がっても否定的なイメージを伴う表現は生まれており、特に16世紀以降に多くの表現が文献に現れるのは、犬の置かれた境遇が関係していると考えられる。現代英語における豊富な表現はその状況で形成されたものである。その後、動物愛護精神の高まりやペットブームの影響によりいくつかの肯定的な用法が加わり、現在に至っているといえる。

キーワード：英語表現、英文学、犬のメタファー

### はじめに

英語には犬が含まれている様々な表現があるが、否定的なイメージが付随している場合が多いことはしばしば指摘される。例えば、dog's life「惨めな生活」や die like a dog「惨めな死に方をする」などは典型的な例である。このような表現は書物だけではなくインターネット上の英語学習者向けの記事でも頻繁に扱われており、犬の否定的なイメージを含む英語表現への関心の高さが窺える。しかしながら、辞書を含めた書物においてもそのようなイメージが付与された理由やイメージの変遷に関して詳しく説明されることはほとんどない。この状況を踏まえ、本稿では英語表現における犬の否定的なイメージの由来とその変遷について考察したい。

## 1. 犬を含む英語表現

英語表現における犬の否定的なイメージの由来を考察する前に、まず犬を含む英語表現にはどのようなものがあるのかを概観したい。はじめに、単純語 dog には動物としての「犬」以外にも多くの意味が与えられているが、比喩的用法やスラングにおいては多くのものは否定的なニュアンスを含んでいる。<sup>1)</sup> 名詞では「役に立たない人物、軽蔑すべき人物」、「裏切者」、「高慢な態度、気取った態度」、「低品質のもの、価値の低いもの」、「魅力的ではない女性」などの意味があり、また動詞としては「尾行する」、「付け回す」、「(不運などが)付きまとう」、「気取る」などの意味で使用される。さらに代名詞 it を目的語に伴った dog it の形では「責任を逃れる」あるいは「仕事を怠ける」という意味を表すことがある。

dog が複合語を構成する場合には、「下等」や「値打ちのない」などのニュアンスが加えられることが多い。植物の名称では、dogberry は「(生のままでは人間の)食用に適さない果樹・低木類」、dog-violet は「香りのないすみれ」を意味する。また dog-cheap は「極めて安いこと」、dog-poor は「ひどく貧しい」という意味で用いられる形容詞である。さらに、dog Latin 「間違いのある、変則ラテン語」、dog breath 「口臭」、dog's chance 「見込みがない」、dogsboddy 「下働き」、dog's dinner 「ごちゃまぜ」、dog days 「停滞期」、underdog 「敗者」<sup>2)</sup> など、否定的なニュアンスを持った dog を含む複合語は数多く存在している。これらの表現は cat が構成する複合語、例えば cat's meow, cat's pajamas, cat's whiskers などの表現がいずれも「最高のもの」を意味することと対照的である。

上記のような複合語に限らず、dog による直喩および隠喩を含む慣用句も否定的なニュアンスを伴っている例が多く見られる。work like a dog は「がむしゃらに働く」、sick as a dog は「ひどく気分が悪い」、treat someone like a dog は「誰かを粗末に扱う」を意味する直喩であり、また dog in the manger は「意地の悪い人」、go to the dogs は「落ちぶれる」、in the dog house は「人気落ちて、面目を失って」をそれぞれ意味する表現である。否定的なニュアンスが与えられるのは諺においても同様で、It is an easy matter to find a staff to beat a dog. 「犬を打つ棒を見つけるのは容易だ」、Better be the head of a dog than the tail of a lion. 「ライオンの尻尾になるよりも犬の頭になる方が良い」、Every dog is a lion at home. 「どんな犬でも家ではライオンになる」、Give a dog a bad [an ill] name and hang him. 「犬に悪い評判を与え、縛り首にしろ」などはいずれも犬の惨めなイメージが解釈の前提となっている。

一方で、犬を含む英語表現がすべて否定的なイメージを伴ったものであるというわけではない。数は少ないものの、犬の肯定的なイメージを含む英語表現もいくつか存在する。人間との親密な関係を示す man's best friend は「犬」の意味でしばしば使用される表現である。また、dog から派生した形容詞である dogged を含む dogged determination は「断固たる決心」、同じく dogged efforts は「粘り強い努力」、dogged persistence は「不断の努力」をそれぞれ意味し、これらの表現は犬の忍耐強いイメージに由来するものであると考えられる。さらに top dog は比喩表現として「実力者」の意味で使用され、dog's bollocks は「最高なもの、状況」を意味する表現である。これらは上で見た表現とは反対に、犬に対する肯定的なイメージが付与されているものである。

以上のように肯定的な犬のイメージを伴った英語の表現は数が少なく、限定されたものとなっている。これに対して否定的なイメージを含んだ表現は、単純語の比喩表現、複合語、慣

用表現のいずれにおいても豊富に存在している。以下では、これらの犬を含む英語表現に関する英和辞典、慣用句辞典の記述を検討したい。

## 2. 辞典における説明

まずはじめに、辞典の中には肯定的な犬のイメージのみに言及しているものがある。『オーレックス英和辞典』の dog の項目には「しばしば人間の忠実な伴侶として扱われる。犬を代名詞で受けるときは it がふつうだが、飼い主などが親しみをこめて、その性別により he または she を使うこともある」(p. 526) と記載されている。このような学習者向けの英和辞典が肯定的なイメージの説明に終始しているのは、代名詞の使用に関連する文化背景を学習者に伝えることが優先されているからであろう。

一方で否定的な犬のイメージについてはいくつかの英和辞典で言及されているが、詳しい説明はほとんど見られない。『ニューサンライズ英和辞典』の dog の項目には、「犬は man's best friend (人間の最良の友) といわれ、忠実の象徴とされる反面、芳しくない表現に使われることも多い」(p. 436) と記されている。ここでは、肯定的な犬のイメージに加えて否定的なイメージでしばしば使用されることにも言及されているが、それ以上の説明はなされていない。また、『ジーニアス英和大辞典』の dog の項目には最良の友としての肯定的なイメージに加えて、否定的なイメージの由来に関して記載されている。

- (1) 英米の日常生活では man's best friend とされ、番犬・ペット・猟犬などとして欠かせない。
- (2) のら犬 (stray dog) の連想から好ましくない意味で用いられることが多い。(p. 645)

この記述によれば、英語表現における犬の否定的なイメージは野良犬の連想によるものであるということになる。これは他の英和辞典よりも一歩踏み込んだ説明ではあるが、その連想についての歴史的な説明は見られない。

これに対して *The American Heritage Dictionary of Idioms* は犬の否定的なイメージを含む表現の起源についてさらに詳しく説明しており、dog's life の項目には以下の記述が見られる。

A miserably unhappy existence, as in *He's been leading a dog's life since his wife left him*. This expression was first recorded in a 16th-century manuscript and alludes to the miserable subservient existence of dogs during this era. (p. 116)

ここでは lead a dog's life という表現の初出は 16 世紀にさかのぼるものであり、その「みじめなイメージ」は当時の犬の従属的な立場に由来すると説明されている。この記述では上記の英和辞典には記されていない時代背景にまで言及されているが、これはあくまでも dog's life という一表現のみに関するものである。また、時代背景の具体的な説明はなされていない。

以上のように、犬の否定的なイメージを含む英語表現はその数の多さゆえに注目されているが、辞典においてその由来が十分に説明されているとはいえない。このように明らかでない犬

の否定的なイメージの由来を考えるにあたり、以下では OED における初出年代を検討することによって犬の否定的なイメージを含む英語表現を通時的に見ていくことにする。

### 3. 犬の否定的なイメージを伴う英語表現の初出年代

犬の否定的なイメージを伴う英語表現を検討するにあたり、まず肯定的なイメージを伴うものの初出年代を確認しておきたい。OED<sup>3)</sup>によると、上記の肯定的なイメージを伴う表現のうち、determination, efforts, persistence と結びつき「断固たる、粘り強い」などの肯定的な意味を加える dogged が 18 世紀で最も古く、「犬」を意味する man's best friend が 19 世紀、top dog「実力者」および dog's bollocks「最高のもの」は 20 世紀が初出となっている。すなわち、これらの肯定的なイメージを伴う表現は比較的最近になってから使用されるようになったものであるということになる。

続いて、犬の否定的なイメージを伴う英語の諸表現の初出年代を OED で見ることにより、それらの表現が生まれた状況を概観したい。単純語で名詞の dog に与えられている否定的な意味の初出年代は、人に適応される「役に立たない人物、軽蔑すべき人物」という比喻用法では 14 世紀である。またアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドのスラングで「裏切者」、アメリカ起源のスラングで「高慢な態度、気取った態度」は 19 世紀が初出となっており、アメリカ起源のスラングで「低品質のもの、価値の低いもの」および「魅力的ではない女性」はどちらも 20 世紀が初出である。一方、動詞の dog では、「尾行する、付け回す」が 16 世紀、また「(不運などが) 付きまとう」も同様に 16 世紀の初出となっている。

次に、犬の否定的なイメージを伴う複合語および慣用句の初出年代を一覧にすると以下のようになる。

表現	意味	初出年代	その他
die like a dog	惨めな死に方をする	15世紀	
dog violet	香りのないすみれ	16世紀	
dog days	停滞期	16世紀	
dogcheap	極めて安い	16世紀	
dog's life	惨めな生活	16世紀	
dog in the manger	意地の悪い人	16世紀	
dogberry	食用に適さない果樹	17世紀	
dog Latin	間違いのあるラテン語	17世紀	
work like a dog	がむしゃらに働く	17世紀	
go to the dogs	落ちぶれる	17世紀	
sick as a dog	ひどく気分が悪い	18世紀	
dog's chance	見込みがない	19世紀	
underdog	敗者	19世紀	アメリカ起源
dogsbody	下働き	20世紀	
dog breath	口臭	20世紀	アメリカ起源
dog it	責任を逃れる、仕事を怠ける	20世紀	
in the doghouse	面目を失って	20世紀	アメリカ起源
dog's dinner	ごちゃまぜ	20世紀	

上記の諸表現の初出年代を検討すると、犬の否定的なイメージを伴う表現は単純語では人に適用される比喩表現としてすでに14世紀には文献に現れている。また複合語および慣用句では16世紀ごろからまとまって文献に現れるようになり、20世紀まで途切れることなく新たな表現が登場していることが分かる。

以上のことから、犬の否定的なイメージを伴う表現で最も古いものは単純語の比喩的表現であり、14世紀にさかのぼるものであるということになる。しかしながら、この結果は dog を含む表現に関するものであり、この単語は一定の時代より以前の記録が存在しない。そこで、以下ではさらに時代をさかのぼって犬の否定的なイメージを含む表現を検討したい。

#### 4. 古英詩における犬を含む表現

現代英語で犬を表す一般的な語彙である dog は、古英語時代末期の行間注解に用例が見られる *docga* にさかのぼる。しかしながら、この *docga* は現存する古英語の文献において一例しか記録されておらず、<sup>4)</sup> 元来は一般的に使用されていた単語ではなかった。古英語時代には、現代英語では主に猟犬を表す *hound* のもとになった単語 *hund* が一般的に犬を表す語彙として使用されていた。

古英詩全体を通して *hund* は7か所で使用されているが、<sup>5)</sup> ほとんどの用例で形容詞を伴わない動物としての犬への単純な言及になっており、犬に対する特定のニュアンスは含まれていない。例えば古英詩 *Riddles*, 24, 2行目および36, 10行目は、謎に対するヒントを与える際の説明としての犬への言及であり、散文におけるいくつかの用例の場合と同様に犬に対する明確なイメージを伴っていない。これに対して、制作年代が9世紀後半から10世紀前半とされている古英詩 *Judith* <sup>6)</sup> には、犬に対するイメージが明らかな表現を含む箇所がある。旧約聖書の『ユディト記』に基づくこの詩では、*Judith* が *Nebuchadnezzar* の将軍 *Holofernes* の首をはねる場面で、*Holofernes* が *hæðenan hund* (l. 110) <sup>7)</sup> 「不信心な犬」と呼ばれている。ここで *hund* と共に使用されている *hæðen* は現代英語の *heathen* にあたる単語であり、*hæðencyning* ‘heathen king’ や *hæðenfolc* ‘heathen people’ などの複合語を構成し、しばしば非難のニュアンスを伴って異教徒に対して使用されるものである。この詩における用例は、この時代にはすでに比喩表現において犬が否定的なイメージを与えられていたことを示している。また、該当箇所の比喩表現が持つ否定的なイメージはキリスト教的な文脈によるものであるということは注目される。これは次節で述べるように、古英詩に限定されたことではなく古英語の説教集などにも同様に見られるものである。

このように古英詩における *hund* の用例は否定的なイメージを伴っているのだが、一方で古英語 *hund* の複合語の構成においては事情が異なっている。<sup>8)</sup> *hund* を含む複合語は豊富であり、その中で犬種を表すものとして、*hēahdēorhund* ‘a deerhound’, *grīghund* ‘a greyhound’, *ryppa* ‘a mastiff’ がある。また *hund* を第一要素とした複合語は植物名にもなっており、*hundeshēafod* ‘snapdragon’, *hundesmicge* ‘cynoglossum’, *hundescwelcan* ‘colocynth berries’ はいずれも特定の植物を意味している。その他にも古英語では、*wēdehund* ‘a mad dog’, *sæhund* ‘sea-monster’, *hundwealh* ‘servant who looked after dogs’ に加えて、いずれも ‘dog’s parasite’ を意味する *hundesbēo*, *hundesflēoge*, *hundeslūs* などの複合語が使用されていた。これらの複合語に関して重要な点は、現代英語におけるような否定的なニュアンスがほとんどないということである。

古英語では上記のような犬に関係する表現が多く存在するが、これは猫に関係する表現が *catte* ‘a female cat’ と *catt* ‘a male cat’ の二単語しか記録されていないことと対照的である。特定の言語においてある事物に関連する表現が豊富である場合には、それが生活に欠かせないものであるということを示しており、実際に古英語においては家畜を表す表現が非常に多く存在している。例えば馬の場合は、*hyrse* ‘a mare’, *stōdmyre* ‘a broodmare’, *horse* ‘a stallion’, *wintersteal* ‘a year old stallion’, *colt* ‘a colt’ などのように表現が細分化されており、牛および豚、羊などの場合も同様となっている。犬に関する表現が豊富であるのは、犬が家畜とともに生活において重要な位置を占めていた可能性を示唆するものだろう。このように、古英語では文学作品における描写が示す犬のイメージと犬を含む複合語が示す犬に対するイメージは一致しないものとなっているのである。

## 5. 神話における犬のイメージとキリスト教の影響

古英詩における犬を含んだ比喩表現の否定的なイメージは、上述のようにキリスト教的な文脈によるものであったが、改宗以前の犬のイメージはどのようなものだったのだろうか。アングロ・サクソン人がキリスト教の導入以前に持っていた犬に対するイメージを直接伝える資料は残されていないが、北欧神話およびケルト神話などからその一端を垣間見ることができる。北欧神話には *underworld* の番犬である *Garm* と呼ばれる犬が登場し、この *Garm* はラグナロクの際には解き放たれて *Tyr* と戦っている。<sup>9)</sup> ケルトの宗教においては、犬は図像学的に多くのさまざまな神に付き添うものとして表現されており、また考古学的には特別な形式で埋葬された犬は地下世界の象徴であると考えられていた可能性を示している。<sup>10)</sup> このようなキリスト教の導入以前の価値観を残している神話においてはアニミズム、多神教的な考えが根底にあり、犬に限らず様々な動物あるいは植物に対して畏敬の念を含めた肯定的なイメージが与えられているのは普通のことであった。実際に古英語の文学作品にも前キリスト教的な動物に対する畏敬の念の名残は散見され、例えば *Beowulf* 303 行目において言及されている *eoforlic* 「猪の像」には、しばしば指摘されるように護符としての重要性があっただろうと考えられている。<sup>11)</sup>

神話において見られるような犬に対する肯定的なイメージに対して、古英詩における犬の否定的なイメージはキリスト教の導入と共にもたらされたものであることは疑いが無い。聖書では犬にしばしば悪いイメージを与えられており、旧約聖書に登場する犬はイスラエルに敵対する異邦人や善良な民を襲う無頼漢の象徴となっている。Psalm 59 は悪の問題について神の正しい裁きがなされることを願う内容であるが、5 節では悪をたくらむ者に対して ‘They return at evening: they make a noise like a dog, and go round about the city’ (Psalm 59:5 KJV) と述べられる。このような表現は、旧約聖書全体を通してしばしば繰り返されているものである。また犬に対する否定的なイメージは新約聖書においても同様に描かれ、引用されることの多い ‘Give not that which is holy unto the dogs, neither cast ye your pearls before swine, lest they trample them under their feet, and turn again and rend you’ (Matthew 7:6 KJV) の一部は慣用表現としてよく知られている。

上記のような聖書における犬に対する否定的なイメージは、古英詩だけではなく古英語の説教集にも忠実に反映されている。Ælfric of Enysham (c. 955-c. 1010) の *Catholic Homilies*, 8.88-98, 104-10 では犬が異教徒の表象として使用されており、また同じく Ælfric の *Lives of Saints*, 18.

344-56 では、アハブ王の後であったイゼベルが犬に食いちぎられて非業の死を遂げるという列王記の記述に基づいた描写が見られる。キリスト教におけるこのような犬の否定的なイメージの根底には、創世記をはじめとして聖書に散見されるような動物を人間の下位に置く動物観<sup>12)</sup>があることは明らかである。

すでに見たように、古英語の文学作品では犬には否定的なイメージが与えられていたが、それはキリスト教的な文脈における一種の定型表現であるといえるだろう。現存する古英語時代の文学作品はすべて修道院において書き写され、保存されたものである。動物を含めた自然に対する畏敬の念を持つ伝統的な価値観とキリスト教的な価値観との対立を経て、古英語時代の文学作品では後者が前面に出ているといつてよい。

## 6. 法律文書と考古学の証拠

すでに述べたように、古英語では文学作品における描写が示す犬のイメージと犬を含む複合語が示す犬のイメージが一致しないものとなっているが、ここでは当時の実際の生活における犬の境遇がどのようなものだったのかを考察していきたい。古英語時代の法律文書の中には、犬を飼うことが珍しくなかったことを示す資料がある。9世紀後半頃のアルフレッド法典<sup>13)</sup>には犬による咬傷の項目が含まれており、第23条では以下のような記述が見られる。

犬が人に裂傷または咬傷を負わせたときは、最初の傷害については飼い主は、6シリングの損害賠償金を支払わなければならない。飼い主がその犬を飼い続けているときは、2度目の傷害については12シリング、3度目の傷害については30シリングを支払わなければならない。

- 1 それらのおのおのの傷害の際に犬が逃げたときにも、その損害賠償しなければならない。
- 2 その犬がそれ以上に人に傷害を加えてもなお飼い主が飼い続けるときは、犬がどのような傷を負わせた場合にも、傷に対する損害賠償金とともに完全な人命金によって損害を賠償しなければならない。<sup>14)</sup>

このアルフレッド法典に限らず、アングロ・サクソン期のイングランドにおける法律文書の大部分は贖罪金、いわゆる賠償金の規定から成り立っている。実際の裁判において法典が使用されたかどうかに関しては議論があるが、上記のような犬の飼い主の賠償金に関する細かな規定の存在は、犬を飼うことが生活の一部となっていたことを窺わせるものである。

次に考古学的な証拠からは、古英語時代には小型犬から大型犬までが猟、牧畜、番犬、害虫駆除などの様々な用途に使われていたことが推測されている。犬は人と居住スペースを共有していたと考えられており、また犬の埋葬形式の中にはアングロ・サクソン期のイングランドにおいて犬と人間が良い関係にあったことを示すものが存在する。<sup>15)</sup>初期のアングロ・サクソン期のイングランドに関するものとして、Foulden cemetery (Norfolk) や Loveden Hill (Lincolnshire) では犬が人間と共に埋葬された状態で発見されており、これらは人間と犬との親密な関係を示唆するものであると考えられている。このようなアングロ・サクソン時代初期に見られる犬の埋葬は、時代が下がりアングロ・サクソン時代後期になるとなくなるのだが、

これはキリスト教の浸透により動物の埋葬が異教の習慣と関連付けられるようになったために避けられたのではないかと推測されている。

考古学的な証拠からアングロ・サクソン期のイングランドでは、牛、羊、ヤギ、豚が食用にされていたことは明らかであるが、これに対して馬が食用にされていた証拠はずっと少なく、犬に関しては食用にされていた証拠は見られない。<sup>16)</sup> この事実は埋葬形式とともに犬が他の動物とは異なる地位を与えられていたことを示唆している。以上のような考古学的証拠は犬が悪い境遇に置かれていなかったことを示しており、このことはすでに見た古英語語彙における犬の複合語に否定的なニュアンスがほとんどないことと一致するものである。古英語の文学作品における犬の否定的なイメージはあくまでもキリスト教的な文脈における定型表現であり、実際の犬が置かれた境遇に由来するものではなかったといえる。

## 7. 中英語以降の文学作品における犬への言及

古英語から時代が下がった中英語の文学作品においても犬が言及されている場面があり、Geoffrey Chaucer (c. 1340-1400) により 14 世紀に書かれた *The Canterbury Tales* には、Colle, Talbot, Gerland と名づけられた犬が登場する。該当箇所では、‘Ran Colle oure dogge, and Talbot and Gerland’ (*The Nun’s Priest’s Tale*, l. 3383) 「犬のコルも走れば、タルボットも走り、ゲルランドも走りました」<sup>17)</sup> と語られ、oure dogge ‘our dog’ という表現と共にそれぞれの名前が紹介されている。該当箇所は犬が人間と一緒に狐を追いかける様子描写であり、ここに描出される人に身近な存在としての犬のイメージは古英語の文学作品には見られなかったものである。

一方 *The Canterbury Tales* の別の箇所においては、犬の比喩表現が使用されている。該当箇所では、‘For in this world nys dogge for the bowe / That kan an hurt deer from an hool yknowe / Bet than this somnour knew a sly lecchour, / Or an avowtier, or a paramour.’ (*The Friar’s Tale*, ll. 1369-72) 「そのわけはこの世で、この召喚士がずる賢い好色漢や姦夫や情人とかを嗅ぎつけるのは手負いの鹿と傷を受けてない鹿とを見分ける獵犬より以上に巧みだったからです」と述べられるが、この表現は肯定的なイメージであるとは言い難い。上でみたような人に身近な存在としての犬の描写はこの時代から現れるものの、犬を含む英語表現に肯定的なイメージが与えられるようになるのは近代英語以降になってからのことであり、中英語以降にも犬の否定的なニュアンスを含む英語表現が引き続き文学作品に現れることになる。

さらに時代が下がった William Shakespeare (1564-1616) の作品には多くの犬に関係する表現が見られるが、大部分が否定的なニュアンスを含むものである。諸作品の中でも *King Lear* では犬を含んだ比喩表現が多く用いられている。‘‘My lady’s father’’? My lord’s knave, you whoreson dog, you slave, you cur.’ (*King Lear* Act 1, Scene 4) 『『奥方様のお父上』だと？お殿様の茶坊主めが、この犬畜生めが、下郎めが、野良犬めが』<sup>18)</sup> というリア王のセリフにおいては dog が slave および cur と並列になっており、罵倒表現として使用されていることがわかる。また、道化のセリフである ‘Truth’s a dog must to kennel’ (*King Lear* Act 1, Scene 4) 「真実は犬小屋に追っ払われる犬だよ」は、侮辱のニュアンスを含む比喩表現となっている。さらにリア王の以下のセリフにおいても同様である。

Thou hast seen a farmer's dog bark at a beggar?

.....

And the creature run from the cur, there thou mightst behold the great image of authority; a dog's obeyed in office.

(*King Lear* Act 4, Scene 6)

お前、農家の犬が乞食に吠えつくのを見たことがあるであろう。

— (中略) —

するとどうだ、あわれな人間はやせ犬一匹におびえて逃げ出すであろうが、これが権力の巨大な姿だ。犬でも役目にありつけばお辞儀をしてもらえる。

引用箇所では王権を手放し転落したリア王の状況が、犬を用いた比喩表現により効果的に語られている。

以上のように Shakespeare の作品においては、犬を含む表現の多くが人に対する侮辱や無力さを表すものとなっている。中英語の文学作品には現代におけるものと変わらない人に身近な存在としての犬の描写が出現しているにもかかわらず、その後の Shakespeare の作品では犬の否定的なニュアンスを含む表現が支配的であることには、当時の犬が置かれた境遇が関係しているだろう。次章で述べる動物いじめは 16 世紀から盛んになり、19 世紀頃までイギリスでは階級を超えた共通の娯楽だった。エリザベス女王は自分の熊の飼育場を持っており、彼女を喜ばせるために熊いじめがしばしば行われていたという。<sup>19)</sup> すでに見たように否定的な犬のイメージを伴う表現の初出例が 16 世紀から 17 世紀にかけて多く見られることは、このような社会背景に関わっていると考えられる。

## 8. 18 世紀以降の犬のイメージと英語表現

イギリスにおける 18 世紀から 20 世紀に至る犬のイメージの変容を考察している石川慎一郎によれば、19 世紀の前半ごろになりようやく動物保護の精神が高まって伴侶や最良の友という考えが生まれたが、18 世紀以前には使役運搬などの労働力として使役されることによる犬に対する虐待は一般的であった。<sup>20)</sup> 16 世紀以降に増加する犬を含む否定的なニュアンスの英語表現の初出例が 18 世紀以降も見られるという事実は、18 世紀当時のイギリスにおいても犬が引き続き置かれていた悪い境遇と無関係ではないだろう。

18 世紀のロンドンでは動物の虐待が日常的に行われており、<sup>21)</sup> 例えばアナグマイじめでは、アナグマを穴の中に逃げ込ませて決められた時間内に何回犬がアナグマを引きずり出すかを観客たちが賭けていた。アナグマが負けるまでに、6 匹ほどの犬が殺されたり重傷を負わされたりすることも珍しいことではなかった。この他にも、雄牛を使った猛獣いじめなどにおいても犬は悲惨な境遇に置かれており、これらのことは犬の惨めなイメージを人々に強く印象付けただろうことは想像に難くない。18 世紀以降も犬の否定的なニュアンスを含む英語表現の初出例が記録されていることには、このような社会背景が関係していると考えるのが妥当である。

このように 18 世紀のイギリスでは犬の惨めなイメージは依然として一般的なものであり、その後にはアメリカにおいてもいくつかの否定的なニュアンスを含む表現が生まれている。

しかしながらその一方で、dog lover (18世紀初出)、dog doctor (18世紀初出) および dog hospital (19世紀初出) をはじめとする犬の境遇の変化を示唆する単語もこの時代から文献に現れ始める。これらの単語の出現は、動物保護、動物愛護の精神の高まりを背景としたものであることは間違いない。そして、20世紀以降ではペットとしての犬のイメージが英語表現にも強い影響を与えるようになる。

英語表現に関するインターネット上のフォーラム 'Living a dog's life' では、以下のような意見が投稿されている。

I was surprised to see that no one thinks "a dog's life" is positive. I've heard it used and have used it to mean, "Boy, is he lucky! No cares in the world. He sure is living the dog's life." I did find this reference to the ambiguousness of the term, though the more negative one is certainly more popular. Has anyone else ever heard of this relatively new association? Maybe it's because every one of my pets and all the dogs in my family are spoiled rotten, so I don't find it so odd at all.

(<https://forum.wordreference.com/threads/living-a-dogs-life.658512/>)

これは通常では否定的なニュアンスで使用される dog's life が「心配のない生活」という肯定的な意味でも使われるとする意見である。<sup>22)</sup> この肯定的な用法は実際に広まっているようで、『ジーニアス英和大辞典』の lead a dog's life の項目においても「苦勞の多い生活を送る」に加えて「(何一つ心配のない) 贅沢な暮らしをする」という意味も収録されている。また同辞典には「最近のペットブームで、後者の意味に使われる方が多くなってきた」(p. 646) という説明も加えられている。16世紀に文献に初めて現れて以来長い伝統がある該当表現も、現代のペット事情の影響によりそのニュアンスを変える結果となっている。

## 結論

犬の否定的なイメージを含む英語表現は、一般的に想定されているよりも古くから存在した。そしてそれはキリスト教的な文脈における比喩的な定型表現に由来するものであり、実際の犬の境遇を反映したものではなかった。一方で時代が下がっても途切れることなく否定的なイメージを伴う表現が生まれており、とりわけ16世紀以降に多くの表現が誕生していることには犬の置かれていた境遇が影響していると考えられる。現代英語における犬の否定的なイメージを含む豊富な表現は、この状況で形成されたものである。その後、動物愛護精神の高まりやペット事情の影響によりいくつかの肯定的な用法が加わり、現在に至っているといえる。

## 注

- 1) dog を含む表現に与えられる否定的なニュアンスは hound にも伴うものであり, スラングでは hound が「嫌な, 卑劣な奴」という意味で使用されることがある. しかしながら, dog を含む表現と比較すると否定的なニュアンスを伴う用法は限られている. また幼児語である doggie には否定的なニュアンスは含まれない. (OED Online)
- 2) これは日本語の「負け犬」を連想させる. 日本語では他にも「犬死に」や「犬侍」などの表現や「犬も歩けば棒に当たる」のような諺もあり, 犬を含む表現が否定的なニュアンスを含むのは英語に限られたことではない. さらに鄭 高咏 (2004) によれば, 古代中国の民俗語彙における犬のイメージも良いものではなく, 犬と付く言葉のほとんどはマイナスの意味をおびている. (鄭, p. 177)
- 3) 本稿における英語諸表現の初出年代は, すべて OED Online を参照した.
- 4) この単語は語源自体も明らかになっていない.
- 5) Bessinger (1978) によるカウントでは 21 例となっているが, これには 'hundred' の意味の用例も含まれている.
- 6) 古英詩 *Judith* に関しては Griffith (2001), pp. 44-45 を参照.
- 7) 引用は *Anglo-Saxon Poetic Records* に拠った.
- 8) 古英語の語彙に関しては, *A Thesaurus of Old English* および *An Anglo-Saxon Dictionary* を参照.
- 9) Davidson (1996), p. 54 を参照. 他にも, ギリシャ神話では犬は地の果てまで太陽と月についていくヘカテに忠義を尽くす存在として描かれている. また古代エジプトの神話にはアヌビスという犬の姿をした神が登場しており, 当時犬が神聖なものとして崇拝されていたことが分かる (フリース [1984], pp. 177-180).
- 10) ケルトの宗教における犬の扱いについては Green (1992), p. 82 を参照.
- 11) Fulk (2008), p. 137 を参照.
- 12) 古英語時代の説教集においても, 動物はしばしば魂がない存在として描かれている.
- 13) この法典の年代に関しては意見が分かれている. 大沢 (2010), p. 176 を参照.
- 14) 大沢 (2010), p. 197.
- 15) アングロ・サクソン期のイングランドにおける犬の埋葬形式に関しては, Poole (2018), pp. 241-242 を参照.
- 16) Pool, p. 234.
- 17) 本稿における *The Canterbury Tales* からの引用はすべて *The Riverside Chaucer* に拠った. また日本語訳はすべて榎井 (1995) に拠った.
- 18) 本稿における *King Lear* からの引用, 及び日本語訳はすべて大場 (2005) に拠った.
- 19)ブリッグズ (2004), p. 178 を参照.
- 20) 石川 (2006) を参照.
- 21) 18 世紀のロンドンにおける動物の虐待については Schwartz (1983), p. 67 を参照.
- 22) この意見に対しては以下のように同意する投稿も見られる.

I thought the same thing. Dogs get to sleep all day, they have no worries, they are clueless about problems associated with living in our world, etc., and all they have to do to earn these privileges is be happy to see us and accompany us on walks. I, too, did a search and was surprised to find that the other negative meaning was more accepted. I guess I'm more used to seeing pampered pets than the lowly, unfortunate variety. Perhaps the meaning of this phrase will become dependent on that other popular WR word - "context".

(<https://forum.wordreference.com/threads/living-a-dogs-life.658512/>)

## 参考文献

- Ammer, Christine. *The American Heritage Dictionary of Idioms: American English Idiomatic Expressions & Phrases*. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Harcourt, 2013.
- Benson, Larry D. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Bessinger, Jr, Jess B, ed. *A Concordance to the Anglo-Saxon Poetic Records*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1978.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller. *An Anglo-Saxon Dictionary*. London: Oxford University Press, 1st ed. 1898; Supplement by T.N. Toller, Oxford: Oxford University Press, 1921, with revised and enlarged agenda by Alistair Campbell, London: Oxford University Press, 1972.
- Dalzell, Tom and Terry Victor, eds. *The New Partridge Dictionary of Slang and Unconventional English*. 2vols. London: Routledge, 2005.
- Davidson, H.R. Ellis. *Viking & Norse Mythology*. London: Bounty Books, 1996.
- DiNapoli, Robert. *An Index of Theme and Image to the Homilies of the Anglo-Saxon Church: Comprising the Homilies of Ælfric, Wulfstan, and the Blickling and Vercelli Codices*. Middlesex: Anglo-Saxon Books, 1995.
- Fulk, RD, Robert E. Bjork and John D. Niles. eds. *Klaeber's Beowulf and The fight at Finnsburg*. 4th ed. Toronto: University of Toronto Press, 2008.
- Green, Miranda J. *Dictionary of Celtic Myth and Legend*. London: Thames and Hudson, 1992.
- Griffith, Mark, ed. *Judith*. Exeter: University of Exeter Press, 1997.
- Krapp, George Phillip and Elliott van Kirk Dobbie, eds. *Anglo-Saxon Poetic Records*. 6 vols. New York: Columbia University Press, 1931-53.
- 'Living a dog's life' <https://forum.wordreference.com/threads/living-a-dogs-life.658512/> (accessed August 30, 2020)
- OED Online. Oxford University Press, 2020. (accessed August 26, 2020).
- Poole, Kristopher. 'Gone to the Dogs?: Negotiating the Human-Animal Boundary in Anglo-Saxon England', in Barbara Hausmair, Ben Jervis, Ruth Nugent, and Eleanor Williams, eds., *Archaeologies of Rules and Regulation: Between Text and Practice*. Oxford: Berghahn Books, 2018. pp. 238-253.
- Roberts, Jane and Christian Kay. *A Thesaurus of Old English*. 2vols. London: King's College London, Center for Late Antique and Medieval Studies, 1995.
- Schwartz, Richard B. *Daily Life in Johnson's London*. London: The University of Wisconsin Press, 1983.
- 石川慎一郎「英国文化における犬のイメージの変容: 社会文化史およびコーパス言語学からのアプローチ」  
神戸大学国際コミュニケーションセンター論集 3, 79-91, 2006年.
- 大沢一雄『アングロ・サクソン法典』朝日出版, 2010年.
- 小西友七、南出康世編『ジーニアス英和大辞典』大修館, 2001年.
- 稲見芳勝〔他〕編『ニューサンライズ英和辞典』改訂新版, 旺文社, 1996年.
- シェイクスピア, ウィリアム著, 大場建治編注訳『リア王』研究社(研究社シェイクスピア選集: 対訳・注解; 9), 2005年.
- チョーサー, ジェフリー著, 榊井迪夫訳『カンタベリー物語: 完訳』岩波書店, 1995年.
- 鄭 高咏「犬のイメージに関する一考察——中国のことばと文化」, 愛知大学語学教育研究室紀要『言語と文化』第10号, 175-195, 2004年.
- 花本金吾、野村恵造、林竜次郎編『オーレックス英和辞典』旺文社, 2013年.
- フリース, アト・ド著, 山下主一郎・荒このみ〔他〕共訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店, 1984年.
- ブリッグズ, エイザ著, 今井宏・中野春夫・中野香織訳『イングランド社会史』筑摩書房, 2004年.